名が署名しているものである。前者に同版の考釈(4)に「辛□卜尹貞、王宮涵。亡𡆥。七月。」とあるものに見え、後者は考釈③に「癸卯卜出貞、旬亡𡆥。八月。」とある中に見える。また殷契粋編一三四八版には「丙申卜㞢貞、今夕亡𡆥。在七月。」とあり、また「丁酉卜旅貞、今夕亡𡆥。在七月。」とあって、「㞢」と「旅」とが同版関係をなしている。「旅」も亦第二期貞人である。以上の如く、これら称謂及び同版貞人関係から、㞢が第二期所属であることは決定的で、董氏の説は補正されなければならない。

(注) 尹・出・旅が第二期貞人であることの証拠。

尹…父丁 珠397, 下278 兄□ 珠397, 続1.27.1 兄庚 珠557, 粋111

出…尹と同版によって明瞭。

旅…父丁 珠397, 続1.31.4 兄□ 前1234, 明232 兄庚 明740

㞢

一 これは王と共貞の貞人であり、第二・三期所属のものと思われる。董氏未収のもので、図版(七)の考釈②に「庚戌卜王曰貞、𠂤延。」とあるのがそれである。これと類似の卜辞を他に求めると次のようなものがある。

辛卯卜王曰貞、勿用。 文録五〇九

乙未卜王曰貞、其田。茲用。 明五五五

□□卜王曰貞、小臣令。 明五八六

癸卯卜王曰貞、雚。 明七三九

乙卯卜王曰貞、翌丙辰其步自雚。 粋一三三二

乙卯卜王曰貞、于丁巳步。 同

右の例は何れも二人共貞であるが、甲骨文録五五五版上には、右の引例の外に別辞として「曰貞」の語があり、「曰」が単独で貞人を務めている形も認められる。しかしこの貞人の特色は多くは王と共に卜問に参与している点に存するようである。なお、卜辞の書体は何れも類似しており、王の縦画が二画に分れて刻まれていることや、「祖辛」の称謂を有することなどからすれば、「曰」は二乃至三期の貞人と考えられる。但し、貞人否定説があり再考を俟つ。

五、結び

以上、書道博物館所蔵甲骨文字の貞人に関する一考察を行って来たのであるが、綜合的に見て、書道博物館の卜辞には多くの貞人を認め、またこれらの中には、上述の如く、従来の貞人を補正すべき資料を提供する重要なものが含まれていることは、特に注目すべきである。なお最後に附説しておきたいことは、新貞人「𠂤一」(図版(八))「㞢・幸」(図版(九))のことであるが、その時期は明らかでなく、書体から推定すれば、第一期に類するものであろう。全般的貞人の考察は後日の機会に俟つこととし、種々御教示を乞うものである。

一九五九年六月十日

六朝宮体の詩について

田部井文雄

一

宮体とは、狭義に限定していうならば、六朝、梁の簡文帝蕭綱(五〇三―五五一)の詩体に対する名である、と考えてよいと思う。梁書や南史の記載によ

る「宮体」という称呼は、そうした限定において用いられている。

余七歳有詩癖、長而不倦、然傷於軽艶、当時号曰宮体。(梁書・簡文紀)

七歳有詩癖、長而不倦、然帝文傷於軽艶、時号宮体。(南史、簡文紀)

このように、軽艶・軽靡の評を得た簡文帝の宮体詩は、その多くを玉台新詠に載せられている。とりあえず、ここでは、玉台新詠にみた範囲内で、宮体の詩について述べてみたいと思う。

玉台新詠十巻は、陳の徐陵（五〇七―五八三）の編と伝えられるが、実際の撰詩にあたっては、簡文帝の意向が強く影響していたものらしい。明の趙均（景禎年間の人）の「玉台新詠後序」や、清の呉兆宜（康熙年間の人）の「玉台新詠箋註」には、唐の劉肅（元和年間の人）の「大唐新語」が引かれている。やや説明の詳しい玉台新詠箋註を引用しよう。

陳書徐陵伝云、太建二年、遷尚書左僕射、後主即位、遷太子少傅。大唐新語云、梁簡文為太子、好作艶詩、境内化之、晩年欲改作、追之不及、乃令徐陵撰玉台集、以大其体。撿比則是書之撰、寔在梁朝、可以明証如是。明是後人所加也。

これによれば、大唐新語の記す所として、玉台新詠は、梁代簡文帝の命を受け、その意を体して、徐陵が撰したものとされている。そして呉兆宜は、現在に伝えられる玉台新詠に、

陳尚書左僕射太子少傅東海徐陵孝穆撰

と記されているからといって、この集が、陳代に入って成ったと考えるのは、誤りであると注意している。しかし、これは或いは、梁亡びて、徐陵が陳に仕えてから、陳の後主叔宝の下で完成した事情を示すものかも知れない。徐陵が、簡文帝にも、陳の後主にも、文を以って仕えたことは、南史に、

梁簡文在東宮、撰長春殿義記。使陵為序。（梁本紀）

初後主為文示陵。（陳本紀）

後主在東宮、令陵講大品経。（陳本紀）

とあることによって明らかである。また、南史には、徐陵について、

其文頗変旧体、緝栽巧密、多有新意。（徐陵伝）

といい、その徐陵の新意は、父徐摛の新変を受け継いだものであることが述べられている。

摛幼好学、及長徧覧経史、属文好為新変、不拘旧体、（中略）摛文体既別、春坊尽学之、宮体之号自斯而始。（南史・徐摛伝）

春坊とは、後の簡文帝、時の皇太子綱の東宮御所、帝とはその父武帝である。徐摛の新風は、皇太子綱の周辺を風靡して、宮体と号せられるに至ったというのである。梁書・庾肩伝には、庾肩吾と徐摛とは、簡文帝の兄、昭明太子の下に参じた、所謂高斎の十学士のメンバアであり、肩吾子信・徐摛子陵（梁書・庾肩吾伝）は、簡文帝の開いた、文徳省の学士となったとされている。庾信は、後に北朝に奔って、北周書・北史に伝を残す。

父肩吾、為梁太子中庶子掌管記、東海徐摛右衛率、摛子陵及信、並為抄撰学士、父子在東宮、出入禁闥、恩礼莫与比隆、既文並綺艶、故世号為徐庾体焉。（北史・庾信伝）

簡文帝の宮体が、その当初から軽艶・軽靡と評せられていたことは、さきにいった。その簡文帝と関係浅からぬ徐庾父子の体が、別に、徐庾体と呼ばれていたというのである。特に徐庾体といい、宮体と名づけられている以上、そこに何等かの差違あっての称であることは確かであろうが、軽艶といい、綺艶といい、評語は甚だしく似通っている。この貧しい考察においては、しばらく、ともに玉台新詠十巻に収められたぐいの作品として、殆んど同一視してゆきたいと思う。編者徐陵も自ら巻頭に「撰録艶歌、凡為十巻」（玉台新詠序）と記しているように、玉台新詠は・軽艶綺艶の詩の集大成であったといってよかろう。それならば、撰録せられた艶歌とは、一体どんなものであったろうか。ここに至って、直ちに、玉台新詠の詩すべてにわたって、細密に検討する必要に迫られるのであるが、ここでは先ず、簡文帝の詩をめぐって調べてみることにしたい。それによって、宮体の詩の如何なるものであるかは、一応知り得るであろうし、そこから六朝宮体の詩考究上の、いろいろな問題点も、見出してゆきたいからである。

二

玉台新詠に最も多く詩を載せるのは、簡文帝の七十六首である。ついでその父武帝の四十一首、沈約の三十七首、呉均の二十六首、王僧孺の十九首と続いて、以上すべて梁代人である。上述の庾肩吾は十一首、庾信は三首、徐陵は四首で、その父徐摛は一首も載せていない。簡文帝の晋安王時代から、庾肩吾等と共にその左右に侍し、所謂宮体の発生と成立に大きく関係した徐摛の詩が、

全く採られていないのは不審であるが、玉台巻七には、この人の作に和して作ったという簡文帝の一首がある。簡文帝と徐摛との関係の密接さから考えても、徐庾体乃至は宮体の詩のなんたるかを知る手がかりとするに、適当な詩であると思う。

和徐録事見内人作臥具　皇太子簡文

密房寒日晩　落照度窗辺
紅簾遥不隔　軽帷半掩懸
方知織手製　詎減縫裳妍
襲刀横膝上　尺堕衣前
駁斗金塗色　箴管白牙纏
衣裁合歓襦　文作鴛鴦連
縫用雙針縷　絮是八蚕綿
香和麗邸蜜　麟吐中台煙
已入琉璃帳　兼雑蔡華氈
与共雕籠暖　非同団扇攀
更恐従軍別　空牀徒自憐　（巻七）

徐録事は徐摛、録事は官名、内人は宮女である。即ち、宮女の夜具を作るのを見て徐摛が詠んだ詩に、簡文帝が和したものである。落照・紅簾・軽帷・織手に始って、金塗・白牙・香・麟・琉璃・雕籠等々、どの句にも、宮女とそれをとりまくものの華麗さをいう語がちりばめられている。そして、合歓襦、即ち「共寝の寝具」を作る女は、男が従軍してしまって、自分が空牀をかこつ身となるのではないかと恐れるというのである。ことばに綺羅を弄び、男女の哀歓の情をうたうこのような詩が、艶歌とよばれたであろうことは、推定できることである。

簡文帝の詩には、この詩のように、他人の作に「擬」するもの、「和」するもの、「同」ずるものが多い。玉台新詠の七十六首中、題に明示するものだけで十七首を数える。擬・和・同せられた詩人は、湘東王蕭繹・庾肩吾・徐摛・沈約・劉孝綽・謝朓・蕭子顕の七人で、みな簡文帝と同時の斉梁の間に輩出し、徐摛以外は、玉台新詠にかなりの詩数を載せている。この種、擬作・和作の詩は、ちょうど、わが国の新古今和歌集あたりに頻出する「本歌取」の歌のように、新たに題を設け、想を構えて創作に従うよりも、先人の題を借り、発想に倣って、詩歌を技巧的に、或いは時に遊戯的に練り上げてゆこうとするものである。というよりも、和歌の本歌取ということこそ、六朝擬作の風に影響されて起ったものであろうが、玉台新詠には、その他の詩人にあっても、この種の作が非常に多い。梁の武帝・沈約・呉均・王僧孺みな然りである。

徐陵は、雑詩四首を自ら玉台新詠巻七に載せている。

走筆戯書応令
奉和詠舞
和王舎人送客未還閨中有望
為羊兗州家人答餉鏡

「応令」は、皇太子蕭綱の命に応じ、「奉和」は、その作に和し奉ったことを意味する。「和」は和作、「為」は代作の意味であって、陵の四首には、自ら題を設け、材を選んでの作というべきものはないことになる。

簡文帝にはまた、徐陵に命じて、「走筆戯書」の詩を作らせたように、自身にも、「戯」の文字を題に冠する詩三首がある。

戯作謝恵連体十三韻（玉台新詠・巻七）については、鈴木虎雄博士の説明がある。

巻三に謝恵連の雑詩三首があった。戯れにその詩をまねて作った詩。此詩をよんで気づくことは同音の語字が折り返して用ゐられてゐることだ。恵連が、西陵遇風獻康楽詩は「文選」にも収められ有名な作であるがその第三章に、曖曖即長路　戚戚抱遥悲　悲遥但自弭　路長当問誰　行行道転遠　去去情弥遅　などとあるところは此詩と似てゐる。現存の恵連詩で見れば恵連に此の如き叙法は多くはないが、簡文の頃にはまだ他に多くあったのかも知れぬ。それで「戯れに」といってまねをしたものであろう。（岩波文庫、玉台新詠集・中・巻七・三八一頁）

簡文帝がならった謝恵連の体とは、鈴木博士の説かれる通りであろうが、それではなぜ「戯れに」としたのかということについては、なお充分には説明されていないし、いまわたくしに、直ちに明らかにすることはできない。

「戯贈麗人」「執筆戯書」の二首は、戯れて麗人に贈る詩、筆を執って戯れに書する詩であって、ともに他のどの詩よりも軽豔・綺靡の評が適切であるように感じられる。

戯贈麗人　皇太子簡文

麗姐与妖嬙　共払可憐妝
同安鬟裡撥　異作額間黄
羅裙宜細練　画屧重高牆
含羞未上砌　微笑出長廊
取花争間鏤　攀手念蕊香
但歌聊一曲　鳴絃未息張
自矜心所愛　三十侍中郎　（巻七）

姐己や毛嬙のように美しくあだっぽい女の姿と心をうたってその女に贈った詩で、美しい化粧と服装を写し、はじらいやほほえみのあでやかさをのべて、女は、三十才で侍中郎となった愛人のりっぱさを心に矜っているようだとうたい終る。その媚態を描いては、恐らくは倡女の類であろうかと思わせる。それが「執筆戯書」においては、明瞭に倡楼蕩婦の舞女、燕姫ありと詠じ出している。

執筆戯書　皇太子簡文

舞女及燕姫　倡楼復蕩婦
参差大戻発　揺曳小垂手
釣竿蜀国弾　新城折楊柳
玉案西王桃　蠡梧石榴酒
甲乙羅帳異　辛壬房戸暉
夜夜有明月　時時憐更衣　（巻七）

美人と共に音楽歌舞飲食をたのしみ、最後に、その美女の一人である更衣を憐れむというである。更衣を憐れむとは、そのまま、賜物をきかえさせてくれる婦人に戯れることを意味し、淫らな連想を呼ぶ表現であるらしい。殊更に「戯」の一字を題に冠した所以であろうか。

他に、題に「戯」の文字を用いている詩が玉台新詠には三首見出される。

戯蕭娘　范靖婦　（巻五）

戯作　梁武帝　（巻七）

戯作艶詩　湘東王繹　（巻七）

などである。梁の征西記室である范靖の妻、そして沈約の孫にあたる沈満願は、玉台新詠に七首を載せているが、次の詩はその一首である。

戯蕭娘　范靖婦

明珠翠羽帳　金薄緑綃帷
因風時暫挙　想像見芳姿
清晨捕歩揺　向晩解羅衣
託意風流子　佳情詎肯私　（巻五）

鈴木虎雄博士（岩波文庫・玉台新詠集・中・巻五・一九五頁）の解によれば、蕭娘は歌妓の名、これは作者沈満願の夫の愛人らしくおもはれる。戯れるという意は此詩の末の二句にある。

ときれ、末二句を

あなたはあの風流漢（夫）にこころをよせられてゐる、わたしはなんでそのをとこの愛情をわたしひとりのものとしましょう、（あなたにも分けてあげます）。

と解釈しておられる。確かに恋敵へのことばとして、このように考えれば、戯れにと特に題した意味は酌みとることができよう。

趙均の玉台新詠後序と、呉兆宜の玉台新詠箋註とに、唐の劉肅の大唐新語が引かれていることは、先にいったが、ここで、大唐新語巻之三によって、前に引いた部分をもう一度、少しく詳しく引用してみたい。

太宗謂侍臣曰、朕戯作艶詩、賡世南便諫曰、聖作雖工、体制非雅、上之所好、下必随之。此文一行、恐致風靡、而今而後、請不奉詔。太宗曰、卿懇誠若比、朕用嘉之、羣臣皆若世南、天下何憂不理。乃賜綢五十疋。先是梁簡文帝為太子好作艶詩、境内化之、没以成俗、謂之宮体。晩年改作、追之不及、乃令徐陵、撰玉台集、以大其体、永興之諫、頗因故事。（大唐新語・巻之三）

唐の太宗が、戯れに艶詩を作ろうとして、虞世南に諫められたことを述べて、その諫言の因る所として、簡文帝の故事を記しているのである。ここで注意す

べきは、太宗が、艶詩を作ろうとして、戯れにとつけ加えずにはおかなかった意識である。唐代にあっても艶詩は、戯れの意識なしには作り出されなかったのではないかと考えられるからであり、玉台新詠に戯れの作が見られるのも、この意識と同様のものが、偶、題として表面に押し出されたと考えられるからである。

范靖の妻には、他に王昭君歎二首、映水曲の短詩、詠歩揺花以下の詠物詩三首がある。そして、この才女の手に成っては、志操高きが故に悲劇の麗人となった王昭君の歎きも、

王昭君歎　范靖婦

早信丹青巧　重貨洛陽師
千金買蟬鬢　百万写蛾眉　（巻十）

といって、軽く戯画化されてしまうのである。

三

玉台新詠において、もう一つ、しきりに見えるものは、詠物詩と思われる詩である。簡文帝の詩の題で拾えば

詠舞　（巻七）
詠人棄妾　（巻七）
詠美人観画　（巻七）
詠武陵王左右伍嵩伝栢　（巻十）

等である。詠物詩の何たるかについては、いろいろ問題もあろうが、玉台新詠の詠物詩に見る限り、若し物を詠ずることを題としていても、それらは、物そのものを詠ずるよりも、男女間の艶情を述べるための一手段として、物を借り用いている詩ばかりのように思われる。「詠人棄妾」や「詠美人観画」の詩のようなものは、それが、題として、はっきり表面に押し出されたのであろう。簡文帝の

賦得当壚　（巻七）
賦楽府得大垂手　（巻七）
賦楽器名得箜篌　（巻七）

のような詩も、詠物詩の一種で、当時文人会合の席で、題をきめて詠い出されたものであることを示している。即ち幾つかの題の中から、簡文帝は、当壚とか、楽府の題の大垂手とか、楽器の名である箜篌とかの題を得て、即席の一首をものしたというのである。そして、簡文帝の詩に、

率爾為詠　（巻七）

という題があるのによっても、当時の、いわば文学サロン的な雰囲気の中では、文才を競って、即席の題詠がなされたということは、察しられるのである。玉台新詠・巻八にある劉孝綽の

賦詠得照葉燭刻五分成

の詩の題は、この間の事情を物語るものと考えられる。（以上、詠物詩に関して述べた部分は、網祐次・斯波六郎両氏の諸論文に導かれる所が多かった。）

このように題をきめて、極めて短時間に技巧を凝らしたのであるから、勢い、その作風が遊戯的になることは避け難かった。簡文帝や武帝に、戯作と称する何首かがあり、同・和の擬作が、あのように多く作られたということも、この詠物・題詠の流行と無関係ではあるまい。簡文帝を中心として所謂宮体をなしたグループも、この詠物分題の詩を作るために形成された、一つの文学サロンへの称であったともみられてくるのである。

即席である以上、詠物詩は、必然的に短句にならざるを得なかった。詠物詩のすべてが、即席の題詠であったとは限らないが、玉台新詠の詠物詩に、長詩は見出し難い。梁の鍾嶸が、漢魏六朝の詩人を、上中下の三品にわけて論評を加えた「詩品」には、下品にではあるが、斉の許謡（玉台新詠の詩は二首、伝未詳）をあげて、

許長於短句詠物。（詩品・巻下）

と評している。ここで短句詠物といわれているように、玉台新詠の詩が、斉梁に下るに従って、即ち宮体の成立に近くなるにつれて、詩体が短くなっていったことも、あるいは詠物詩の流行と、すくなからぬ連関が、考えられるかもしれない。

玉台新詠巻十にある梁鹿・新燕・弾箏のような簡文帝の詩も、「詠」の一字を省いた詠物詩であると考えられる。

梁鹿　皇太子簡文

依帷漾重翠　帶日聚輕紅
定為歌声起　非関団扇風（巻十）

すぐれた歌い手がうたうと、梁の塵がうごくということから題をとって、男女の情や美女の姿態について、直接には触れていない。しかし、漢の班婕妤が、成帝の寵を失って「怨詩」を作り、秋の団扇のように捨てられた自分を悲しんで以来、団扇の怨みといえば、そのまま、捨てられた女の怨みを意味する様になった。この詩の場合の団扇も、それと全く無関係ではあるまい。言外に連想せしめるものとして、男女間の情や、楽曲に託しての美女の状のようなものがあったに違いない。

玉台新詠巻十は、このような五言四句の軽い民謡風の歌ばかりが集められており、簡文帝は二十一首を載せている。最後にその第一首をあげよう。

寒園　皇太子簡文

被空眠数覚　寒重夜風吹
羅幃非海水　那得度前知

独り寒い夜の閨房にいる女が、男の愛を求めて、うすぎぬのとばりは海水ではない、渡ってこなければ、こちらがどんな女であるかわかるはずがないとのべる詩である。この体の詩は、例を求めれば、わが国の古くは遊女における「今様」のようでもあり、近くは市井の「都々逸」にも通う、俗謡の類とすることができよう。玉台新詠の詩六百六十二首中、巻十の五言四句詩は百五十五首、すべていわば流行歌的な軽さで、気軽に詠い出された、多少頽廃的・官能的な詩風を持つ小詩の体とすることができる。それだけに、軽豔・軽靡とされながらも、一種モダンな感じで迎えられ、斉梁の時代に入って大流行を来したのであったろう。

（東京武蔵高校教諭）

王弼繋辞伝註の存否について

――講周易疏論家義記を資料として――

藤原高男

一

王弼易註について、陸徳明は、その釈文叙録に、

永嘉之乱、施氏梁丘之易亡、孟京費之易、人無伝者。唯鄭康成、王輔嗣所注行于世。而王氏為世所重。今以王為主。其繋辞已下王不注。相承以韓康伯注続之。今亦用韓本。

と、論じ、「王弼注七巻」を録して、

字輔嗣、山陽高平人。魏尚書郎。年二十四卒。注易上下経六巻、作易略例一巻。又注老子。七志云、注易十巻。

と、註する。又、周易音義「周易繋辞上第七韓伯注」下には、

本亦作韓康伯注。案王輔嗣止注六、講者相承、用韓注繋辞以下続之。

〔註〕敦煌本周易音義無此註。

と、註する。頴来相承して、「王弼易註に、繋辞・説卦・序卦・雑卦諸伝の註なし」と、せられている。隋志「周易十巻」に、

魏尚書郎王弼注、六十四卦六巻。韓康伯注繋辞以下三巻。王弼又撰易略例一巻。

と、註し、両唐志に、「又七巻、王弼注。又十巻、王弼・韓康伯注。」及び、「王弼注七巻。王弼・韓康伯注十巻。」と、著録するが如きである。又、南斉書高逸顧歓伝に、

歓口不辯、善於著筆。著三名論甚工、鍾会四本之流也。又注王弼易二繋、学